

3 足型付土版について

足型付土版は縄文時代の北海道・東北地方に限定された遺物である。用途は、幼児の健やかな成長を祝う護符、魔除、“立ち祝い”などの慶事のほか、墓の副葬品と推定されるが、結論は出されていない〔春成 1985・2007、熊谷 1986、遠藤 1986、忽那 2006^{など}〕。

西郷遺跡ではX層から左右各1点の足型付土版が出土した。出土状況の詳細は不明であるが、近接して出土していること、形状・成形が共通することから一対、つまり同一人物の足型であると推定される。

現存長は左足 10.55cm、右足 10.25cm である。いずれも土版とほぼ同じ大きさの足型が残されているので、被採取者の足の大きさが反映されているとみなせる。焼縮みが 10%あるとすれば、被採取者の足の大きさは約 12cm と推定される。この大きさは現代の幼児であれば 1 歳 2～3 か月位の大きさに相当する。土踏まずが未発達であることから、活発に歩き始める前の 1 歳位の年齢であると推測される。参考までに、20 年以上裸足保育に携わってこられた保育士に足型から年齢や性別が判断できるものか尋ねてみたところ、次の回答を得た。①絵の具を足裏に塗布して紙に押圧する方法で足型を採取してきたが、足型だけでは男女の判別はできない。②土踏まずができるのは平均で 1 歳半～2 歳頃であるが、男女差ではなく活発な子どもかどうかで差がでる。

足型付土版の出土例はこれまでに 49 例あり、西郷遺跡の 2 点で 51 例となる。これまでは新潟県岩船郡山北町上山遺跡例〔新潟県教委 1969〕が分布の南限であったので、西郷遺跡は最も南での出土例となる。

時期は縄文時代後期が多いが、北海道では縄文時代早期にも 30 例ある。これまでの最も新しい時期のものは北海道恵庭市柏木川 4 遺跡で縄文時代晩期後葉とされている〔谷島・吉田 2007〕。西郷遺跡では縄文時代晩期末葉～弥生時代前期と考えられるX層から出土しているので、最も新しい時期に属する。

県内では先述の上山遺跡に縄文後期後半の右足の出土例（重要文化財）がある。足裏をほぼ同大の粘土版に押し付ける点や穿孔するところなど西郷遺跡と共通する面もあるが、時期的に若干離れているので、直接関係があるものなのかは明言できない。

西郷遺跡で足型付土版が出土したことは、当時ここに暮らしていた人たちの精神的なよりどころが東北地方の縄文文化により近いものであったことをうかがわせる。

4 縄文時代晩期末葉から弥生時代中期の遺跡の変遷について

A 遺構に基づく変遷

Ⅶ～XⅠ層の各面で遺構検出を試みた。Ⅸ層までは遺構はほとんど検出されず、X～XⅠ層で竪穴状遺構・掘立柱建物の柱穴や土坑等を検出することができた。しかし、狭小な調査区のため、掘立柱建物の形状を知ることはできなかった。安全確保のためXⅡ層まで完全に調査することはできなかったが、掘削していればXⅡ層でも遺構が確認できたはずである。以下に遺跡の変遷等についてまとめる。

地形 調査区北側を古墳時代前期以降の河川に破壊されているため詳細は不明である。しかし、図版 3 の南北断面を見ると、X層以上の層が河川に向かってわずかに落ち込んでいくので、もともと北側には河川が流れていたと推定される。Ⅶ層の 3B 土器集中区周辺が地形的に最も高い場所であったが、これは自然堤防に由来するものであったかもしれない。